



ヨットと私

会員 吉岡 桂輔 (24期)



1 ヨットの手習い

都会育ちのせいか、海へ行くのが好きで、沖に浮かぶ白いヨットは憧れであった。

最初にヨットに乗ったのは、大学1年と2年の体育授業で、夏だけで単位のもらえるシーズンスポーツ、「ヨット」に申し込んだが、さすが希望者が多く、2年続けて抽選に外れ、やむなく自費で鎌倉材木座海岸でのヨットスクールに入った時。Y15という小型ヨットながら、メインとジブの二枚の帆があり、寺での合宿と実技でヨットは風上45度位まで走れること、ジグザグに走ると、風上含め、どんな方向にも走れて楽しいことを学んだ。

2 マイヨット

しかし、その後は、司法試験受験生活と弁護士業務が忙しく、全くヨットと縁がなかったが、40代の終わり頃に、たまたま年の近い友人の医師と、人生でやり残したことないか等とヨットの話になり、思い切って2人でクルーザーヨットを買い相模湾の小坪で再開した。港の出入りに船外機のエンジンが付いているが、沖に出ると帆だけで走るので究極のエコ乗り物である。天気図など見ながら、海況の良い時に乗ったが、一番の効用は、港を出て、風と波を感じると仕事のストレスが全く飛んでしまうことである。

夜は夜光虫が波に光るのも綺麗で、自然の素晴らしいさに感動する。

3 ヨットレース

その後、葉山マリーナに移ったが、ここではヨットレースが年間20回以上、しかも1月から盛んに行なわれていた。

マリーナのヨットクラブに入会し、レースを見ていると、参加してみたくなった。

ヨットレースは最低でも5人くらいの人数が必要で、

乗員（クルー）集めが大変といわれる。私の場合は幸運にも娘の会社のヨット部の仲間が最初に協力してくれ、さらに、その友人が友達を誘い合い、クラブレースに出るようになった。

最初はレースで苦戦したが、やがて母校ヨット部の元監督やレース艇で歴史と実績のあるチームとも親しくなり、コーチも受けて、ヨットレースにのめり込むようになった。

4 醍醐味

忘れられないのは、5年ほど前、鳥羽（志摩）から太平洋側を、湘南の江ノ島まで2昼夜かけて走るパールレースに出て、深夜、御前崎沖の海上を満天の星空と天の川の中を帆走したときのこと。

まわりが全て暗い中、ヨットの計器の照明のみが見え、コンパスと北極星を目印に走っていると、あたかも船が天空に登って行くかのような不思議な感覚になった。もちろん錯覚ではあったが、まるで神話に出てくる馬車が空に駆け上がるような素晴らしい体験であった。

5 幸運

ヨットにはまって20年以上経つ。葉山のクラブレースや隣の逗子マリーナのレースで優勝したりもしたが、そろそろ体力的にもレースはキツイと思っていた本年5月に、外洋レースとして歴史のある第67回大島レースで優勝してしまった。

このレースは葉山を昼前にスタートし熱海沖の初島を回り、伊豆半島沖を南下し、さらに大島を回って葉山に戻る一晩かけて走るレースである。

4回目の挑戦であったが今回は翌朝4時頃、予想より早めにゴールすることができて、幸運がめぐってきた。もちろんクルーにも恵まれたが、長年続けた海からのご褒美と感謝している（写真は田中一美氏撮影、このレースのゴールシーンである）。